

丹波の森づくりのこれまで

自然と人と文化が調和した地域を「丹波の森」と呼び、大切に守り育てていく。丹波地域住民は、この思いを昭和63年の「丹波の森宣言」に込め、実践してきました。その結果が日本の原風景といわれ、全国に誇れるふるさと丹波の今の姿につながっています。

【丹波の森宣言】(S63.9.1)

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私たちはこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

S63.6	「丹波の森10人委員会」の発足 丹波総合開発促進協議会(丹波地域10町で構成)が「丹波の森宣言」の起草と「丹波の森協会」の設立に向けて協議を開始。
S63.8	住民代表による「100人委員会」の開催
S63.9	「丹波の森宣言」の採択、2万1,616世帯が同意署名 「丹波の森1,000人大会(さわやか県土シンポジウム)」で森宣言を採択。併せて住民主体で丹波の森づくりを進める「丹波の森協会」の設立を決議。 ウィーンの森との姉妹提携の提案採択 丹波の森がウィーンの森のように、都市と丹波地域の一体的な生活圏を形成する姿を提示。
S63.11	「丹波の森協会」発足(H18兵庫丹波の森協会に、H24(公財)兵庫丹波の森協会に改称)
H元~現	ウィーンの森親善訪問開始 ウィーンの森づくりを現地学ぶため、第1回ウィーンの森親善訪問団を派遣。 (4年後のH5.11に丹波地域とウィーン13区・ヒーツイング間で友好提携親善調印)
H7~現	丹波の森基金の設置 未来の子どもたちからあずかっている大切な財産を守るための基金を設置。基金運用益を自然環境の保全など丹波の森づくり事業に使用。また、丹波の森づくり募金箱を地域20カ所に設置。
H7~12	地域文献の収集 自然や歴史の貴重な文献資料を所在調査。図書館、学校、個人が所有する地質、動植物、古文書など約1万件の資料を収集・データベース化。
H8~現	丹波の森研究所設置 丹波の森づくり実践活動を支援するため、専門研究員を配し調査・研究や技術的指導業務を行う研究所を設置。
H10	丹波の森協会設立10周年記念事業実施
H13~現	地域ビジョンの策定、活動 「丹波の森構想」の取組成果と課題を踏まえ、住民自らが丹波地域の望ましい将来像を描き、共有し、取り組んでいく指針を策定。
H20	丹波の森構想20周年検証報告会実施 「丹波の森構想」の策定から20年を経過。この間の地域づくりの成果、課題等を評価・検証し今後の地域づくりの方向性を提言するため、丹波の森構想評価・検証委員会を組織し、検証フォーラム等の開催とともに報告書をまとめる。



新しい都市基盤の完成

S61.11 JR福知山線の電化(H9.3 篠山口駅まで複線化)

S62.3 舞鶴自動車道(丹南篠山口-福知山間)

S63.3 (吉川-丹南篠山口間)の開通

ホロンピア'88の開催

S63の4~11月に、豊かな自然と文化に育まれた田園と、優れた都市機能が調和した“新しい田園文化都市”の創造をめざして北摂・丹波の祭典-ホロンピア'88が開催された

宣言1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

- 丹波らしい土地利用を進める
- 山を守り育てる
- 川や水辺を守り育てる
- △農地を守り育てる
- ▲野生動植物と共生する(生物多様性を育む)

宣言2 丹波の自然景観を大切に、花と緑の美しい地域づくりを進めます。

- 丹波らしい景観形成を進める
- 自然を体験する公園をつくり、活かす
- 森を巡る道を活かし、景観を楽しむ
- △花を飾り、もてなす

宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切に、個性豊かな地域文化を育てます。

- 文化と歴史を大切に、町・建物をつなぐ
- 恐竜が生きた大地で暮らす
- 森の中で芸術・文化・スポーツを楽しむ

宣言4 丹波の素朴さと人情を大切に、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

- “もりびと”になって、ふるさとを元気にする
- 丹波ブランドを育成し、産業を振興する
- 丹波ファンを拡大し、交流を促進する
- △安全安心な地域をつくる

▲S63~現 水分れ域の生物多様性の情報発信

S63にホロンピア'88の会場として、本州一低い中央分水界がある氷上町石生に水分れ資料館を建設。水分れ域の地形・地質、ミナミトミヨなど魚類を中心とした生物の生態・分布等にテーマをしばり、解説展示がされている。入館者は、のべ8万人(H7からの統計値。H29年度は2,704人)。

丹波市はH22から「氷上回廊」ホームページを開設し、山に挟まれながら南北に伸びる低地帯の“氷上回廊”。それを取りまく豊かな自然や文化を通じ、気候変動(地球温暖化)と生物多様性の2テーマに目を向け、丹波市の環境について発信。

□S63~現 各地区の自然と文化を生かした施設づくり(ゾーンの森づくり)

丹波の森の中の各地区に、固有の自然景観や文化景観などを生かした、人と自然、人と人との交流が促進される場を整備。S63にホロンピア'88の会場として、丹波年輪の里、多紀連山O2の森、四季の森公園、水分れ公園、遊農園かすが、菓草葉樹公園などを先行して建設。その後、さんなん仁王駅、今田ふるさと公園、丹波悠々の森、丹波篠山溪谷の森、青垣の杜、三ツ塚史跡公園、エルムいちじまなどを建設。

○S63~現 文化の拠点施設の整備

S63にホロンピア'88の会場として、舞台芸術を振興するたんば田園交響ホール、春日文化ホールを建設。

■S63~現 伝統技術の伝承

- ・S63のホロンピア'88で立杭陶の郷を会場に「大丹波焼と現代に生きる六古窯展」を開催。
- ・H元に丹波杜氏の由緒や古くからの道具や資料を展示する丹波杜氏酒造記念館を開設。
- ・国指定の選択無形文化財である丹波布の技術を伝承するため、H10に丹波市丹波布伝承館を開設。丹波布伝習生を2年一期で養成している。卒業生は67名(H29年度末)。また、丹波市ブランドとして、その魅力を全国に広く発信するため、H28から地域おこし協力隊(丹波布)1名を配置。

■H3~現 丹波の森大学(旧「丹波の森づくり大学」)、丹波OB大学・大学院の開講

H3に丹波の森づくりの実践者を養成するため、地域づくり、環境づくりの講義と現地研修を交えた講座を行う現丹波の森大学を開校。これまでに274回、のべ1,818人が受講(H29年度末)。また、生涯学習の一環として、高齢者に学習と交流の機会を提供するとともに、社会の担い手として永年培ってきた知識や経験をより磨き、魅力ある地域社会を創り出す実践者を養成するためのOB大学を開講し、H16には丹波OB大学の卒業生を対象とした丹波OB大学院を開校。これまでに269回開講、189人が修了(H29年度末)。

□H6～現 県緑条例による開発の規制誘導

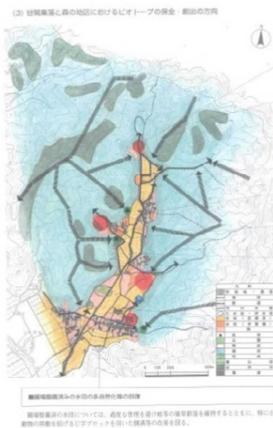
H6に丹波の森づくりを土地利用の面から支援するため県緑条例を制定。地域全体を5区分して開発基準を定め、H7から開発を規制。H15の改正で、原則として開発を禁止する「森を守る区域」を2割から7割に大幅に拡大。その他の区域でも緑化、景観等の独自基準（ガイドライン）を設けて開発を誘導。

丹波の森づくりならではの厳格かつきめ細かな運用を実施。また、H11から住民主体で定める詳細な土地利用計画「地区整備計画」を策定。県内17地区のうち13地区が丹波地域での認定。



▲H8 丹波ビオトーププランの策定

H6に多様な野生動物が生息できる空間(ビオトープ)の保全と創出を目指して、行政をはじめ事業者や県民が各種の事業や日々の暮らしのなかで取り組む全県的な指針となる「兵庫ビオトーププラン」を作成。生物の生息情報とその保全方針を土地利用計画の前提として地図化しているドイツの手法に習ったもので、我が国においては画期的なもの。H8にこの指針をもとにして、丹波地域ビオトープ地図(プラン)を策定。



□H11～現 森づくりスタッフの養成・里山倶楽部の活動

H11から丹波の森公苑の里山を活動の場とし、間伐や枝打ち、刈り払い機などの講習を行う森づくりスタッフ養成事業を実施。里山の自然や生き物とのふれあいを通じて、森づくりに参画する人材の育成を図る。H15には森づくりスタッフOBが、住民自らが文化資源としての森の活用を考え実践する里山倶楽部を創設し、現在、26名が苑内里山林の整備等活動中。



□H14～現 森林管理100%作戦・災害に強い森づくり

H14からスギ・ヒノキ人工林について、市町と連携した間伐・作業道開設等「森林管理100%作戦」を実施。間伐の実施率は15,000/29,000haで52%(H29末)にとどまる。H18から「緑」の保全・再生を社会全体、県民総参加で取り組む仕組みとして「県民緑税」を活用した「災害に強い森づくり」を推進。住民参画型森林整備を丹波市4地区で実施。H24から緑化基金等を活用した住民参画型里山林再生事業を篠山市4地区、丹波市16地区で実施。住民団体による森林・里山整備活動が広がっている。

▲H16～現 貴重動植物の保護に取り組む団体の活動

H16からホトケドジョウを守る会が継続的なフィールド調査や探索活動のほか、生息地の再生・造成や危険分散地への放流などの保全活動、住民への啓発活動を実施。環境省及び県の絶滅危惧種に指定されているホトケドジョウは、県内では丹波地域のみ確認されており、優れた自然環境と、日本海側と瀬戸内海側の生態系が交錯する氷上回廊の貴重さを物語っている。



□S63～現 丹波年輪の里の木工教室等

地域の木工クラフト活動の拠点として、多種多様な木工教室を開催。全国規模のクラフト展の会場となっている。

来場者は、のべ559.8万人(H29年度は9.4万人)
・S63の丹波年輪の里開設時から、初心者から上級者まで対応可能な特別木工教室を開催。
・S63から木工作品の素晴らしさや木の温もり、安らぎを広く県民に普及・啓発するため、丹波の森ウッドクラフト展(木のおもちゃ大賞展)を全国公募で開催。全国の多くの方々から木に親しみ、自らの手でものを創り出す創作の喜びあふれる作品の出展があり、H29には第30回を迎えた日本最大規模の公募展。



・H4から丹波地域におけるクラフト文化の向上、創作活動の普及を図るため、全国各地で活動しているクラフトマンが一同に集い、園内での自由な作品展示や販売、来園者と交流するアートクラフトフェスティバルを開催。
・H24からは丹波地域で創作活動をしている木工家の木の椅子脚を展示公開する「座っ展ー丹波でうまれた木の椅子」展を開催。木とのふれあいの中で、物づくりの楽しさを伝え、森林や環境を考える心を育てる木育を推進。



○S63～12 「ふるさと桜づつみ回廊」の形成(ネットワークの森づくり)

S63に丹南町サクラ協会が篠山川兩岸の桜並木づくりを開始。H元に篠山市が建設省「桜づつみモデル事業」の認定を受け篠山川の桜並木を整備。H3から県が瀬戸内海から日本海を結ぶ桜の回廊を整備。丹波地域内だけ柏原川と篠山川の二股に分かれており、一斉に咲く様が随所から見られ、春の訪れを一層華やかに印象づける。



○H元～現 たんば三街道の並木道整備(ネットワークの森づくり)

H元に県がたんば三街道の愛称「丹波の森街道、水分かれ街道、デカンショ街道」を決定。H2に標柱やシンボルモニュメントを設置。H8からネットワークの森づくりとしてケヤキ、モミジ、クスノキの並木を整備。H17にたんば道路景観ガイドラインを策定。H19に「たんば三街道」の名称で、「川代恐竜街道」も含めて国が日本風景街道に認定。



■H5～現 県景観条例による地区指定等

・H5 篠山市城下町地区が歴史的景観形成地区
・H8 デカンショ街道地域が風景形成地域
・H20 丹南篠山口IC周辺地区が沿道景観形成地区
・H21 篠山市上立杭地区が歴史的景観形成地区
また、H17より篠山市で3件、丹波市で5件の古民家、洋館等を景観形成重要建造物等に指定。

H17 篠山市大山上の西尾家住宅
H18 丹波市青垣町の廣田家住宅
H19 同市同町の平岩家住宅
H20 篠山市日置の中立舎
H21 丹波市柏原町の幽石軒
H22 同市同町の大新屋日山代官跡
H26 篠山市糺ヶ坪の八上小学校
H27 丹波市春日町の畑家住宅



■H5～現 古民家や洋館の再生

・H5 旧篠山町役場を観光拠点施設に活用(大正ロマン館-篠山市)
・H21 古民家を宿に活用(集落丸山-篠山市)
・H27 古民家をホテルに活用(NIPPONIA-篠山市)
・H27 旧氷上高等小学校校舎をレストラン等に活用(たんば黎明館-丹波市)
・H28 大学と地域住民が連携して古民家をワーキングスペースに活用(衣川會館-丹波市)
・H30 古民家を改修保存(俳人細見綾子生家-丹波市)



○H7～現 丹波の森国際音楽祭シェ・レ・ティ・ア・デ・たんばで音楽の森づくり

「みんなで創ろう音楽の森」を合言葉に始まり、国内外からアーティストを招聘し、地域交流・国際交流の輪を広げる国際音楽祭を民間ボランティアが中心の実行委員会が開催。オープニングコンサートやガラ(ファイナル)コンサート、丹波地域の住民が企画・運営する「街角コンサート」(10会場)、子どもたちにプロの生演奏を届ける「ふるさと音楽広場」(幼・小)、「キン・コン・カン・コンサート」(中・高)などを実施。20年以上の取組により、今では丹波地域の秋の風物詩となっている。地域内外からのべ11万人超が来場。全国に誇れるイベント。



■H8～現 講座「丹波学」の開催

「丹波の森」に対する理解を深めるとともに、丹波地域の多様な資源や魅力を再発見し、主体的に地域づくりに参画しようとする意欲の高揚に結びつけるため、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に研究する地域学として全5回の講座からなる「丹波学」を開催。これまでに102回、のべ1,975人が受講(H29年度末)。



■H12～現 「もりびと」の育成

丹波の森づくりを持続的に進めるため、生まれ育った地域に愛着と誇りを持つふるさと意識の高い人材を各年代で育成。H12から「たんば子ども塾」を開催。丹波地域の6高校を会場に、高校生が先生となり小学生を対象に、工作体験や科学実験、生きもの採集など、各高校の専門分野や所在地域の特色を活かした講座を開催。H21から「丹波の森若者塾」を開催。丹波地域の6高校の生徒が、地域に活動拠点をもち3つの大学の学生のサポートを受けながら、特産品を活かした商品開発など、ふるさとの魅力を発見し、活かす研究・体験・交流活動を実施。H23から小学校のふるさと学習の成果発表を実施。小学校で行われているふるさと学習の成果を、発表会「たんばっ子！学びフェスタ」やパンフレット「丹波地域まちの自慢発信事業」で地域内外に広く発信。



■H15～現 「もりびと」による地域活動の展開

H15から地域団体等が取り組む地域活性化のための先駆的事业(都市との交流、子育て支援、健康づくり、まちづくり、環境保全など)に助成する交流促進パワーアップ事業を実施。これまでにのべ414団体が事業を展開(H29年度末)。県民交流広場の本格実施に伴いH22に篠山市でまちづくり協議会、H18に丹波市で自治振興会(自治協議会)が、小学校区44地区全てに設置され、地域活動の推進母体が整った。その後、両市とも支援制度を設け活動を推進。また、過疎化、高齢化等の進展する地域で、地域の自主的・主体的な取組による賑わい創造や活性化、農業振興、定住、空間活用等を促進し、地域の再生を総合的に支援するため、H20から小規模集落元気作戦がスタートし、H22から地域再生大作戦と銘打ち、丹波地域の小学校区単位組織で数多く実施。県内実施地区66地区のうち丹波地域は18地区と最も多く活動が展開されている(H29年度末)。また、地域内のNPO法人数は65団体で、10年前の38団体から大幅に増加。

・丹波市神楽(しぐら)地区(一般財団法人 神楽自治振興会)
H24に田舎暮らし体験施設(かじかの郷)を整備。あわせて地域にある交流拠点を積極的に活用し、多彩な交流イベントを通じてUIJターン調査や空き家利活用意向調査を実施するなど、戦略的に移住を推進。



・篠山市雲部(くもべ)地区(くもべまちづくり協議会)
H25に「稼ぐしくみ」づくりとして、閉校となった雲部小学校の校舎を生かした直売所、加工施設、レストラン等を整備し、「里山工房くもべ」を開設。



・篠山市城南(じょうなん)地区(城南地区まちづくり協議会)
H28に「交流やにぎわい」づくりとして、閉園となった城南保育園の園舎を生かした同地区生産の農産物の直売や加工、加工品の販売を行う、カフェハウス併設の食と農の交流拠点「アグリステーション丹波ささやま」を開設。

・H17 から丹波地域の里山に準絶滅危惧種の国蝶オオムラサキが舞う姿を取り戻し、良好な里山環境を次世代に繋げていくため、飼育を開始。



H8の丹波の森公園開苑時に河合雅雄氏の提唱によりオオムラサキの幼虫を育てる母なる木エノキを170本植栽。H21にオオムラサキの第1回放蝶会を実施。現在、20の小学校・幼稚園、1つの高校で幼虫の飼育が行われるなど環境教育に役立つと好評。また、H22に「国蝶・オオムラサキが飛翔する里山空間を創造する」を目的に兵庫丹波オオムラサキの会が設立し保全活動を実施。

・H20から多紀連山のクリンソウを守る会、H24から妙高山のクリンソウを守る会が活動開始

・H24から丹波市青垣町桧倉自治会と神楽自治振興会がバイカモの保護活動を開始。



・H25に貴重な動植物の保存活動を行っている住民団体(H28末で24団体)と行政が連携し、環境パートナーシップ会議(住民団体、行政)を設立。住民参加型フォーラムやエコツアーなどの環境学習を開催。貴重な動植物を保全・再生する意識の高揚を図っている。



□H19～現 企業の森づくり

企業が社会貢献活動の一環として、所有者に代わって地域の森林を整備・保全する活動に対し、森林作業の技術指導などの支援を実施。H19に県内初となる企業と住民による森づくり協定を、三菱電機㈱と笹山市油井の住民が締結。これまでの活動企業は全县で34社、内6社が丹波地域であるが、活動を休止する企業もあり、現在は以下の3社が活動中。

- 三菱電機㈱ 油井鎮守の森 (笹山市油井)
- アサヒビール㈱西宮工場 遠坂アサヒの森 (丹波市青垣町遠坂)
- 東洋電機㈱ 甲賀の里の森 (丹波市水上町成松)

◆ 遊歩道の整備



◆ シイタケの植菌



▲H19～現 県立森林動物研究センターの開設

H19に野生動物の調査研究を行う拠点施設を全国に先駆けて開設。人と野生動物と自然環境の調和のとれた共存をめざすことを基本理念とし、野生動物による農林業被害等の軽減、森林資源や生物資源等の持続的利用、野生動物と共存する地域文化の創出などを基本目標とする。施策実行手段の確保のために「森林動物専門員等制度」を創設。



△H20～現 有害鳥獣被害対策の推進

鳥獣被害対策を推進するため、篠山市はH20に鳥獣被害対策推進協議会を設置し、H27には獣害に強い集落づくり支援員を、H29に鳥獣被害対策実施隊を配置。丹波市はH25から丹波市有害鳥獣担当専門員2名を配置。

△H元～現 花づくり活動の普及・支援

H元に丹波10町(現2市)から選定された10小学校をモデル校に指定し、種子や育苗資材を配付する「花いっぱい運動」を開始。

H6に丹波の10地区を対象に、地域の花づくり愛好家などを対象とした、園芸や緑化活動に関する学習機会を提供する「花と緑の村づくりモデル事業」を実施。H13から花、緑、園芸に関する知識の習得及び地域での普及活動のリーダー育成を目的に「花と緑の教室」や「園芸教室」を開催。



■H2～現 「丹波景観100選」の選定

H2に丹波の魅力ある景観を広く伝えるため、丹波景観100選を指定し、それを盛り込んだ「丹波の森ガイドマップ」を作成。H3には「景観百選ビデオ」を制作し丹波の魅力を発信。

○H2～現 ハイキングコースの設定 (ネットワークの森づくり)

H2からハイキングイベント「丹波の森を歩こう」が開始。H8に16のハイキングコースを丹波の森径ガイドマップで紹介。篠山市では、H22に山歩きガイド、H26に24ルートの登山マップを作成するとともに、毎年5月5日を「GoGo! さとやまの日」と定め、多紀連山の山開きなど登山イベントを開催。



■H4～現 丹波ランドスケープ広域計画による風景形成

H4に県が丹波ランドスケープ広域計画を策定。地域の風景を構成する山々、川、農地、集落等の要素と構造を明らかにし、地域の自然や文化を大切にしたい風景形成の考え方、方向性を示したもので、丹波の森づくりを進めるための基本的な計画。県下各地域で同様の計画が策定されているが、当地域のように上位に基本理念を置く計画はない。その後、H20に県景観条例に根拠づけられた計画として、丹波地域景観マスタープランを策定。



○H7～現 サイクリングコースの設定 (ネットワークの森づくり)

H7に丹波サイクリングロード・丹波の森径基本構想を策定。H28に篠山市がサイクリングコースを設定しウェブで公表。市内を自転車で巡る人に役立ててもらうため、日本遺産に認定された名所旧跡や観光スポットなどを含めたコースを紹介するホームページ上の地図「ささやまサイクリングマップシステム」を作成。トライアスロン男子の五輪代表を務めた八尾彰一さんらが各コースを完走して監修。

■H10～現 「丹波のむかしばなし」発行

丹波の子どもたちがこころ豊かに育ってほしいという願いから、丹波に伝わる民話をまとめた「丹波のむかしばなし」をH10からの12年間に10巻発行。全巻で120の民話が収められており、これまでに800冊以上を販売(H29年度末)。H22から、丹波のむかしばなしを語り継ぐ、「語り部くらぶ」の活動を支援。



■H11～現 中心市街地活性化基本計画と街なみ環境整備計画による柏原城下町の景観形成

H11に柏原町が中心市街地活性化基本計画を策定、H12に地域の企業、商店、個人が(株)まちづくり柏原を設立、古民家とテナントをマッチングするテナントミックス事業を展開。H21に第2期、H28に第3期の中心市街地活性化基本計画を策定。

また、H15に柏原町が城下町周辺地区の街なみ環境整備計画を策定。通路や小公園などの地区施設を整備、街づくり協定による歴史的建造物の修景を助成。



■H12～現 篠山城大書院の再建

篠山城大書院は天守のなかった篠山城の中核をなす建物。S19に消失したが、市民の熱い願いと尊い寄付によってH12に再建。



○H13 映画「森の学校」完成上映

こどもの生き生きとした命を育み、その身体に命の大切さを感じこませる自然の中での楽しい遊びの世界を、初代丹波の森公園長河合雅雄氏の著「少年動物日誌」を脚本として映画化。丹波の森づくりの理念を具体化する映画で、この映画を通して「自然と家族を語る」シンポジウムを開催。

○H14～現 子どもミュージカル体験塾の開催

H14から子どもミュージカル体験塾を開催。豊かな感性や表現力、コミュニケーション能力を育むとともに、子どもたちが創造する楽しさを体験し舞台芸術に親しむことを通して、舞台芸術創造活動のすそ野の拡大を図る。約40名の子どもたちが15回程度のレッスンを重ね、劇団に所属する俳優との共演による発表公演を行っている。



○H14～21 創作オペラおさん茂兵衛の上演

H14から上演された丹波地域発の市民オペラ。近松門左衛門や井原西鶴の作品に登場する「おさん茂兵衛」を題材に、物語のゆかりの地である丹波での逸話をモチーフにした創作オペラ。市民が中心となり、創作、上演。



・丹波市上久下地区 (上久下自治協議会)

H18の恐竜化石発見を機に「恐竜の里づくり協議会」を発足させ、観光客をもてなす取組を開始。H23から地域内公募で出資者を募り「企業組合元気村かみくげ」を設立。地域の特産品販売、化石発掘体験など地域経済の活性化を図り継続性のある取り組みを推進。



・丹波市春日部地区 (春日部自治協議会)

H29にみんなが集いふれあう交流の場として、地域拠点の春日部荘を改修し、栄養士のメンバーが地元食材を使ったケーキなどを提供する「カフェはるべ」を開設。

・丹波市和田地区 (和田自治振興会)

江戸時代後期の天保11年から続く薬草栽培を地域の活力として「さんなん和田漢方の里まつり」を行い、全国に発信。丹波市立薬草・薬樹公園と兵庫医療大学の連携に地域も参加し、薬草を使ったうどんを開発したほか、もうひとつの特産品である若松の商品化にも取り組んでいる。

・篠山市福住地区 (福住地区まちづくり協議会)

地区の将来ビジョンの一つ「世界と交流する“新しい宿場町”」実現のため、地域外への魅力発信を目的として冬の夜空に花火を上げる「ふくすみ雪花火」を実施。



△H16～現 防災リーダーの育成

地域防災の担い手を育成するため、「丹波地域防災リーダー講座」や「防災情報活用研修」において、防災情報サイトからの情報入手体験など実践的な講義及び演習を実施。



○H16～現 ぶらり丹波路、旅丹、大丹波連携による観光情報の発信

H16から「ぶらり丹波路」と題した丹波地域のイベント情報紙を四季毎に発刊。H22から京都府と兵庫県にまたがる大丹波地域(2府県、6市1町)が連携して観光情報の発信を行い、誘客を促進。H27から旅人が見たありのままの丹波路の写真集をウェブサイトに掲載、掲載写真はフリーダウンロード可能となっており好評を得ている。



■H18～現 大学生による地域貢献活動

H18に関西大学が丹波市青垣町、神戸大学が篠山市、さらにH21には関西学院大学が丹波市柏原町に活動拠点を開設。H28に神戸大学・篠山市

フィールドステーションを開設。地域住民と連携したまちづくり活動を展開。これまで17地区、のべ10大学46団体という他地域に見られない多彩な活動を大学間連携フォーラムを開催しながら展開。



△H20～現 丹波市有機の里づくりの推進(丹波市)

丹波市が全国40箇所の「有機農業モデル地区」のひとつに選ばれたH20に、丹波市有機農業研究会を核にして、「丹波市有機の里づくり推進協議会」が設立。H31に市立農(みのり)の学校を開校予定。



△H21～現 日本一の農業の都篠山市の農都宣言(篠山市)

H21に、食の安全と安心を未来にわたって育み、篠山特有の自然を生かし、農業の新たな先駆者として更なる振興を実現するため、次の3つを基本理念とし、「自然の気候風土に恵まれた日本一の農業の都 篠山市」を宣言。

1. 「いのち」を支える「農」を未来に育みます。
 1. 「農」を支える「人・土・水」を大切に育みます。
 1. 「丹波篠山」を支える「特産物」を育みます。

H26に、農業と農村を大切に守り続け、日本の「農都」として篠山の農村風土を継承してきた素晴らしい環境の中で、地域の基幹産業である農業を大切に、市をあげて農業振興に取り組むことを明確にするため、「篠山市農都創造条例」を制定。



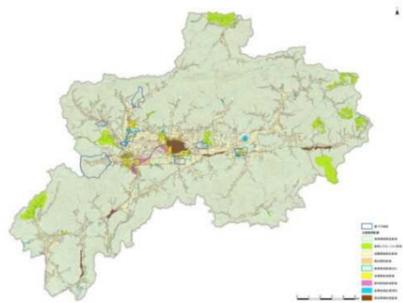
H28には、先人が築いてきた、かけがえのない市民共有の財産「農都」を次の世代に引き継ぐため、「篠山市農都創造計画」を策定。また、H28に、新規就農者や農業後継者の学びの場とする「丹波篠山農学校」を開校。

■H23～現 篠山市まちづくり条例の改正(篠山市)

H23に良好なまちづくりを推進するために、一定規模以上の建築や開発行為を行う場合の事前協議や許可申請について、景観や住環境に影響を与えないよう適正な開発誘導を図るため、建築物の用途変更や一定規模以上の土地利用の目的変更の行為を許可対象に加える条例を改正。

H26に美しさと豊かさを備えた篠山の風土、その固有この価値を継承し発展させる「農の都」を実現するため、まちづくりの基本姿勢と役割を明らかにし、土地利用を推進するため、土地利用基本計画を策定。上記事例と連携。

H30から太陽光発電施設の規制を強化。



□H24～現 木の駅プロジェクトの展開

市民の力で間伐、軽トラで搬出、木の駅(ストックヤード)に持ち込み、換金する仕組み。H24から篠山市で、H27から丹波市で、NPO法人の主催により取組みを開始。両市は原木買取価格



に上乗せするなど支援し普及に努めている。地域全体で活動が行われているのは、県内で丹波地域のみ。H27時点の参加者数は約140人、集荷量は約130t。

□H8～現 丹波の森の中核となる施設づくりと多様な自然体験プログラムの実施(シンボルの森づくり)

丹波の森公園

H8に丹波の森づくりの拠点施設として丹波の森公園が開苑。芸術文化や自然体験等様々なプログラムを実施。来場者は、のべ547.7万人(H29年度は23.7万人)

- ・H15から小学生が、森の中での様々な生活・自然体験を通して、本当の自然を知り、親しみ、さらに自然や生命の大切さを体感する縄文の森塾を開催。H18からはキャンプを取り入れて実施。
- ・H20から丹波の豊かな自然とふれあい、そこに息づく草木や生きものを観察しながら、自然や生命の大切さを学ぶため、親子家族を対象に、里山ふれあいハイキングを開催。



ささやまの森公園

H14に自然と人が共生する豊かな森づくりを推進するふるさとの森公園としてささやまの森公園が開園。自然体験ができる様々なプログラムを実施。来場者は、のべ28.9万人(H29年度は1.5万人)

- ・H14から秋の里山まつりを、H15から春の里山まつりを開催。木工クラブ、草木染め、地元食材の料理提供などのイベントを実施。
- ・H15から夏に里山コンサートを開催。
- ・H20から森の学校を開催。小3～6年生が年間約10回のシリーズで里山を体験。H28からは篠山東雲高校生にも対象を拡大し、里山文化を学習。
- ・H28から5月5日の里山の日に特別企画として間伐材を使った動くおもちゃづくりなどを実施。



丹波並木道中央公園

H19に広域な都市公園として丹波並木道中央公園が開園。都市と農村の交流・地域活性化、森林の新たな保全・再生モデルの実現を目標に自然とたっぷりふれあえる公園として事業実施。全国的にも珍しい製材所のある都市公園。園内の森林の間伐し製材している。来場者は、のべ108.7万人(H29年度は14.2万人)

- ・H23から、県園芸公園協会・兵庫丹波の森協会が指定管理者となり事業を実施。公園内の間伐材を利用した大人の木工教室、こどもクラフトのイベントを実施。
- ・H24から篠山市と連携して大人を対象とした里山スクールを開催。
- ・H24から毎週月曜日に木工サポーターの活動として、公園の間伐材を利用した施設内ベンチの作成やスキルアップ講座を実施。
- ・H27からゴールデンウィークに木登り体験ツリーイングを実施。
- ・H28から5月5日の里山の日に特別イベントを実施。



■H14～現 名木巨木の保全

H14に「丹波の森 名木ガイド」の初版発行(H28に改訂版)。巨木120本と樹林20カ所を紹介。H29には環境パートナーシップ会議が篠山市内の名木巨木をめぐるエコツアーを開催、多数の参加を得た。



■H16～現 国重要伝統的建造物群保存地区に選定

- 「篠山まちなみ保存会」、「福住まちづくり協議会」が歴史的な町並みの保存活動を進め、
- ・H16 篠山市篠山伝統的建造物群保存地区(河原町地区)
- ・H24 篠山市福住伝統的建造物群保存地区が国重要伝統的建造物群保存地区に選定される。H29から外観を修理または修景する場合の助成制度を運用。



■H17～現 民俗芸能保存・継承事業

数多くの伝統芸能や伝統文化を育んできた丹波地域は、室町時代から江戸時代の各時代の芸能がまんべんなく継承されているのが特徴。丹波地域の民俗芸能、伝統文化を地域の文化資源として再評価し、保存・継承の気運醸成、地域の活性化のため、民俗芸能・継承事業を実施。



■H17～現 兵庫陶芸美術館の開館と陶芸文化の振興

日本六古窯のひとつ丹波焼の里篠山市今田町に立地。「土と語る、森の中の美術館」として、地域の文化資源や豊かな自然環境をいかしたエコミュージアムの環境を創出。全県的な陶芸文化の振興を図り、陶磁器を通した人々の交流を深めることを目的に、各種展示会のほか、次世代を担う人材養成、学校等との連携、陶芸ワークショップ等の創作・学習事業を実施。



□H18～現 恐竜化石等を活かしたまちづくり

- ・H18 丹波市山南町で約1億1千万～1億年前にできた地層(篠山層群)から恐竜化石発見、発掘調査を実施(化石発掘調査第1次～第6次)発掘には住民がボランティアとして参加。さらに、発掘調査中断後、H26から「新たな発見で地域おこしを」と住民主体による試掘調査を開始し、H27の卵の化石発見につながった。
- ・H20 篠山市において、国内最古級のほ乳類化石発見。発掘調査実施後、様々な化石発掘体験イベントを開催
- ・H20 丹波市が丹波竜の里計画を策定。計画に基づく事業を展開(ちーたんの館、元気村かみくげ、丹波竜の里公園)
- ・H22 地元住民を中心に「たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり協議会」設立(H29丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進協議会に改称)
- ・H26 「恐竜化石フィールドミュージアム構想」を策定篠山層群とまわりの地域を野外博物館と位置づけ、恐竜が生きた大地で暮らすという構想のもと活動開始



■H18～現 移住・定住の促進と空き家活用

H18から丹波地域の田舎暮らし実践者と都市部の住民が交流する「たんば・田舎暮らしフォーラム」を開催。H22に篠山市が、H27に丹波市が空き家バンク、H28には仕事情報サイトを開設。H22に篠山市が篠山暮らし案内所、H25に丹波市が丹の里田舎暮らしワンストップ相談所を開設。現在では、両市とも住まいと仕事のワンストップ窓口を設け、空き家活用の補助事業、起業支援事業などを創設して移住・定住を促進している。



また、H28から県民局が主体となり、丹波地域で田舎暮らしを実践している人と都市部の若者子育て世帯が交流する場「たんば暮らしファン交流カフェ・セミナー」を開催し、移住・定住のきっかけづくりを行っている。

□H23～現 丹波すぐれもの大賞による顕彰

H23から地元企業の優れた企画力・技術力をアピールし、地域の産業を活性化するため、「丹波すぐれもの大賞」による表彰を行い、広く情報発信している。これまでに、きらめき(製商品)部門で19件、わくわく(食料品)部門で15件が受賞し、その後、多くが全県レベルの表彰へとつながっている。H30からときめき(事業イベント)部門を新設。旧雲部小学校をカフェレストランに活用した里山工房くもべが初受賞。



□H23～現 丹波栗、黒大豆、大納言小豆のブランド戦略、フェア

H23から大阪等の都市部で丹波味覚フェア、H25から栗の「丹波栗食べ歩きフェア」、H28から「丹波大納言小豆ぜんざいフェア」を開催。H26に「日本一の丹波栗」の産地復活に向けた基本構想、H28に「丹波大納言小豆ブランド戦略」を策定し、生産基盤を強化とブランドイメージの定着を戦略的に推進。また、篠山市では「丹波篠山味まつり」、丹波市では「丹波三宝スイーツフェスティバル」を開催。



□H24～現 丹波市森林づくりビジョンの策定（丹波市）
丹波市域の75%を占める森林は県下第5位の面積を有し、多面的な働きを有する大切な資源。中長期的な視点に立った森林のあるべき姿や保全・整備の方向を明らかにし、市民との連携のもと市全体で支える体制を構築するため、「丹波市森林づくりビジョン」を策定。

○H25～現 ささやまの川・水路づくり指針の策定（篠山市）

生き物の生息環境を保全するための基本方針として、「ささやまの川・水路づくり指針」を策定。H25に実施戦略として、『未来につながる「篠山の美しい自然と生き物』を基本目標に、かつての美しい自然と生き物を復活させることを目的とした「生物多様性 ささやま戦略」を策定。また、H28からコンクリート三面張りの水路を生物多様性・多自然型の護岸に改修する「ふるさとの川再生事業」に取り組む。H30に河川における生き物調査を実施。



□H26～現 篠山市ふるさとの森づくり条例の制定（篠山市）

豊かな森は多様な命を育み、森で育まれる水は農村生活に必要な水資源となり、身近な植物や農作物を育む。命を育む豊かな森と水を未来につなぐため、「ふるさとの森づくり条例」をH25に制定。H26から植林地の間伐100%（325ha×20年）がスタート。

△H28～現 丹波市版半農半公制度（丹波市）

都市部から丹波市に移り住んで、丹波市の非常勤一般職員として一定の生活費を得ながら農業に従事できる環境を提供する制度を創設。期間終了後は、市内で農業の担い手として活躍できるよう支援し農業後継者の育成を図る。

▲貴重種の観察会

- ・せつぶん草（丹波市）
- ・かたくり（丹波市）
- ・クリソウ（篠山市・丹波市）



△H15～現 たんばオープンガーデンで我が家の庭から丹波の森づくり

丹波地域の園芸愛好家で作る「丹波の森花くらぶ」が長年にわたり自主運営を続けている。限られたスペースでの植栽に工夫を凝らし、現在では、ガイドマップが作成されるなど、丹波の春を愛でる行事として定着。



■H22～現 篠山市景観条例等の制定（篠山市）

H22に先人たちが長い歳月をかけて日々の営みとともに培ってきた丹波篠山の景観を、未来に向けて継承し、ともに創造していくことを目的に「篠山市景観条例」を制定。景観法に基づく景観行政団体となり、同条例を施行。翌H23には、地域の景観形成の考え方、ルール、景観形成を推進するための施策を定め、行政・市民・事業者協働の取り組みにより、地域の良好な景観形成を実現するため、「篠山市景観計画」を策定。H26に地域の特性に応じた良好な景観形成や公衆に対する危害を防止するため、屋外広告物のルールを定める篠山市屋外広告物条例を制定。景観行政、屋外広告物行政とも、県行政から独立して取り組むこととなった。



△花祭りの開催

- ・野上野れんげまつり（丹波市）
- ・にしきシャクナゲまつり（篠山市）
- ・清住コスモスまつり（丹波市）
- ・丹波もみじめぐり（丹波市）



- ・H29 太古の生き物館を開館
篠山層群についての学習や体験が行える施設として、篠山市が丹波並木道中央公園内に開館
- ・H29 丹波市の呼びかけで、北海道むかわ町、熊本県御船町と篠山市、丹波市の4市町が連携する「にっぽん恐竜協議会」を発足。



○H21～現 丹波篠山まちなみアートフェスティバルの開催（篠山市）

城下町の風情を残す国重要伝統的建造物群保存地区で町屋や古民家、商家群の街角を舞台に彫刻・立体造形・絵画・写真などの美術・工芸作家の作品でアート空間を創出するフェスティバルを開催。

■H27～現 篠山市に2つの日本遺産（篠山市）

H27に時代ごとの風土や名所、名産品などを歌詞に盛り込み歌い継がれてきた「デカンショ節」が、H29には丹波焼をはじめ、日本古来の技術を継承している「日本六古窯」が地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化・伝統を語るストーリーとして日本遺産に認定。さらに、H27に篠山市がユネスコ創造都市ネットワーク加盟都市となり、クラフト&フォークアート分野で丹波焼と地元食材をマッチングさせた「丹波篠山食と器のピエンナーレ」などの活動を進めている。



■H29～現 篠山城下町地区が国景観まちづくり刷新モデル地区に指定（篠山市）

全国10地区の一つとして国が指定。電線地中化や道路美装化などを進め、城下町の魅力に磨きをかける。



○スポーツ大会の開催

- ・篠山ABCマラソン大会（篠山市）
- ・三ツ塚マラソン大会（丹波市）
- ・全国高等学校女子硬式野球選手権大会（丹波市）
- ・丹波もみじの里ハーフマラソン大会（丹波市）
- ・全国車いすマラソン大会（篠山市）



△H26～現 丹波市復興プランの策定（丹波市）

H26.8に発生した集中豪雨により、住宅が損壊し、道路、河川、農地、森林等に甚大な被害。一日も早い復興に向けて、地域のめざすよりよい将来像を描き共有し、50年度、100年後の活力ある丹波市に向かってそれぞれの力と方向性を結集するため、「丹波市復興プラン」を策定。単に旧に復するのではなく、被災地が抱えている様々な課題を、人口、コミュニティ、住まい、安心・安全づくり、農業、森林の5つの重点分野に分け、識見を有する方々や公募による市民で構成する委員会の提案を受けた先進的事業により再生しようとするもの。



△H27～現 いきいき百歳体操・いきいきデカボー体操の普及

高齢になっても互いに支えあい、安心して過ごせる地域を目指して、住民主体で運営する高齢者の通いの場「いきいきデカボー体操」「いきいき百歳体操」の実施地区を拡大（平成29年9月末109か所、高齢者の約1割が参加）。



○H28～現 丹波焼の里・城下町直通バスの運行

2つの日本遺産「丹波篠山デカンショ節」（篠山市街地）と「きつと恋する六古窯」（丹波焼の里）をつなぐ直通バスを篠山市と共同で期間限定運行。兵庫陶芸美術館、丹波焼の里をより多くの方が来訪できる環境を整備。H28から試験運行。H30から本格運行に移行。

□H29～現 丹波篠山コシヒカリ宣言（篠山市）

丹波篠山コシヒカリの美味しさをアピールするため、「丹波篠山コシヒカリ宣言」を発表。丹波篠山産米の良さ、魅力を広く発信。



■祭り・イベントの開催

- ・丹波焼の里 春ものがたり、陶器まつり（篠山市）
- ・大国寺と丹波茶まつり（篠山市）
- ・丹波篠山デカンショ祭（篠山市）
- ・丹波ハビネスマーケット（丹波市）
- ・春と秋のなみきみちマルシェ（篠山市）

